

日本PTA全国研究大会 新潟大会の報告 (8月24日分科会・県内10か所/25日全体会・長岡市)

第6分科会 ●環境教育(佐渡市) 子供達の豊かな 未来への環境境域 〜野遊びのスヌメ〜

新潟県佐渡市、佐渡島全域が市域の人口約56000人の自治体。自然豊かで歴史・文化も色濃く市民による伝統・文化の継承が盛んな町である。新潟港から佐渡市両津港までフェリーで二時間半、高速船だと一時間で着く。会場の両津文化会館までフェリーターミナルから旧市街地の商店街を歩いて20分と行ったところだろうか。長い商店街はシャッター街と化し、人通りはまばらで営業している店舗も少ない。全国的にも地方都市は過疎化が進んでいるが、離島ということもありなおさらなのであろう。

会場では高千中学校郷土芸能クラブの人形芝居が行われていた。三味線の弾き語りに合わせた人形が表情も感情も豊かに舞い踊る。佐渡は古く流刑の島であったため各地の貴族文化、武家文化、町人文化が配流者によって今に多く伝えられ、その伝統を学校教育に取り込み、クラブ活動で伝統の引き継ぎが行われている。

競い合う心で伝統を継承していく

鬼太鼓も佐渡の重要な伝統である。小気味よい太鼓に合わせ鬼に扮した子供が舞い完成度の高い踊りに目を奪われる。この鬼太鼓も地域の大人が、子供達に熱心に指導し、



地域独自のリズム、踊りを競い合って稽古に励み伝統が継承されていく。

冒険心と感性を磨くサポートを

本題の環境教育であるが、モンベル会長の辰野勇氏による講演が行われた。辰野氏は冒険家・登山家でありアウトドア総合メーカーを設立した人物である。「0・3%の冒険者」。

社会の0・3%の人は冒険心にあふれた改革者であるという。それは、危険をかえりみず突き進むタイプの人間である。今の社会はこの冒険者が作り上げたといっても過言ではない。例えばチンパンジーは危険だと感じるとそれ以上のは絶対にはしないが、人間は危険と感ずるも限界を超えた先を見るために命を削ってでも挑戦する動物である。その好奇心、冒険心があるからこそここまで発展してきたのだ。失敗しても学習し進化する。医学、工学、文学その他すべて過去の冒険者によって培われ発展してきた。

冒険するためには集中力・判断力・持続力が必要である。この力はいわゆる「勉強が出来る人」の共通点と思われるがそうではない。この三つの力を養うための手段としての方法の一つが「勉強」である。登山など危険を伴う環境に身を置くことも三つの力を養う方法である。さらに冒険するには判断力も必要となる。

この力を子供の頃から養うには大人の協力が必要である。過保護ともいえる世の中では大人の協力とは、危険を完全に排除し手助けをするのではなく、まずは見守ることが重要。現在では学校でケガをするようなことがあれば過剰に問題視し、要因を排除しようとする。本来であれば危険を察知し、ケガをしないよう子供自身が集中し判断し行動するよう促さなければいけない。なにもかも安全であるよう危険を排除するということは子供が成長を妨げているということだ。

30〜40代の保護者の多くは子供の頃ファミコンが一通り普及し外遊びが減り、家の中で遊ぶようになってきた世代である。その世代の親を持つ子供たちはさらに進化したテレビゲームはもちろんだことそれだけスマートフォンを持ち、SNS等で過剰なまでの情報社会で成長するパリアル世代。親ですら外で遊ぶ経験が少ないから子供達も当然のこと。今は親も子供も生きる経験が少ないのだ。

すぐに今の生活をやめることは可能であろう。しかし、子供にとって本当になにが必要なのかを見つめ直す時ではないだろうか。元来子供は

好奇心旺盛で冒険心に満ち溢れている。大人はその冒険心を尊重し見守り子供達の五感を刺激し、無意識の感性を磨くことが人間らしい本当の成長でないだろうか。

なぜこの分科会が佐渡島で行われたのか。会場が短い時間であるが島の文化に触れ、自然豊かな佐渡島を見てからこの研究発表会や講演を聞いて納得が出来た。島の子供達は学校の授業でも教員以外の地域の大人たちと島の自然、産業、文化、歴史等深く関わりあっている。これは佐渡市教育基本方針によるものであり、市、教育委員会、地域住民、子供達と横の繋がりが強固なのだ。大人から子供へ、その子供が大人になりまた次に繋ぐ。きつと50年後も変わらない佐渡島があるはずだ。

野遊びのスヌメとは、ただ野山で遊ぶだけでなく、生まれ育った郷里を学び感性を磨く教育のことなのかと感ずった。(松田 唯)

第2分科会 ●家庭教育(三条市) 子供の心が育つ家庭教育 〜これからの社会を生きる 子供達の成長をねがって〜

日本の子供達は、多様化が進む家庭状況、情報化やグローバル化によって変化する社会の中で様々なことを体験し、学び成長していきます。近年の子供達の傾向として、豊かな感性、国際性、ボランティアや社会貢献への意欲等で良い姿が見られます。一方、生命や人権を大切にすることを、自制心や規範意識、人間関係を築く力が弱くなっていると言われています。諸外国と比べ、自尊心が低く将来への夢を描けない子供が多いとの指摘もあります。このような子供達に家庭・学校・地域の中で体験を通して道徳心を育むことの重要性が高まっています。家庭環境の中での子供達の健やかな心の成長を促すために私たち大人はどのように取り組んでいけばよいのか考える機会でした。

安心感持つ言葉、大人は発信を

主に研究発表では子供達とのコミュニケーションの取り方がテーマで、現在のSNSやパソコンを使ったネット環境で失われつつある、言葉、心のコミュニケーションの取り方などが紹介されました。親子はもとより、学校の心の成長となることでしょう。子供達が安心感をもつ言葉を大人は発しなければいけません。励ましの言葉も圧力となるかもしれません、大人は子供達の味方になりきるコミュニケーションで安心感を与えなければいけません。

情報化社会の今、大人は原点に立ち直り、子供達とのコミュニケーションを今一度見直す時がきたのだと思います。(九鬼町子)